

# ふじみさらダボール子育て情報

「発達と自己性」

令和元年9月18日号

板橋富士見幼稚園



## 昔から、泣く子は育つ

子どもが1歳を迎えた頃から「じんぶで」と、しきりに言い張る時期を思い出しませんか。専門的にはこの時期を【自己性の芽生える時期】といいます。ちょっとしたことで思い通りにならないと大泣きし、親を困らせた経験はありませんか。

子どもが発達する過程で、特に幼児期の知恵が育ち始めるころには、好奇心も同時に芽生え、触ったり、見に行ったり、食べてみたりと、五感をフルに生かした遊びが活発になります。遊んだものも広がる一方で、おもちゃ箱なども決して片付けようとはしません。遊びは広がり、自己主張は激しくなるばかり…そんな中で大泣きされてはたまったものではありません。

2歳を過ぎるころは、こうしたことがピークに達し、「わがまま」「気まま」にならないように、絶対許さないと対決姿勢で構えたことはありませんか。



でも、少し考えてみましょう。実は、子どもの発達には順序性があり、好奇心が芽生え始め、周囲の出来事がとても気になる時期があります。そして次に自己欲求が高まり、五感で触れたいと、親に強く欲求してきます。この欲求を満たす手段として、「大泣き」という手段を身に着けます。

許される、許されない、などその時と場で激しく葛藤を経験するのです。

実は、幼い時期は自分の世界は親と一緒にの世界の中にあるという感覚で、自分の存在はあまり理解していないのです。ところが、2歳ぐらいになると周りをはっきりと見えてきて、「自分」という存在に気づき、自分の思いを主張していくことを覚えるのです。つまり、知恵を授かった証拠なのです。この証拠をもっと伸ばしてあげることが、知的な発達に繋がります。

遊びは、知恵の宝箱です。いろいろな好奇心に触れる遊びは、考え、工夫し、ものを作り出す知的な経験になります。時に大泣きしたら、「知恵が育っている証拠なのね」と、受け入れながら対応してあげてほしいものです。もちろん、「泣けば思いどおりになる」という習慣がついては困りますが、その時の子どもの思いを冷静に判断できるよう、お母さん自身も心の余裕を持ちましょう。